

霞

—2016年度春季展示室だより—

土浦市立博物館

平成28年5月14日発行(通巻第34号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展示室や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(34)

古写真「明治9年に建てられた土浦小学校校舎」



目次

○古写真・絵葉書にみる土浦(34)・・・	1
○博物館からのお知らせ・・・	1
【館長講座及び催し物等】	
○仏に供える灯(古代)・・・	2
○僧無住の遺産(中世)・・・	3
○飲み水をもとめて(近世)・・・	4
○土浦小学校の最初の校舎(近代)・・・	5
○市史編さんだより・・・	6
○地域と博物館・・・	7
○霞短信「モノの見方あれこれ」・・・	8
○コラム(34)・・・	8
○情報ライブラリー更新状況・・・	8

明治9(1876)年に新築完成した土浦小学校です。土浦小学校は東・西・香澄小にわかれ、完成当時、この校舎は東校と呼ばれました。右手の平屋は、土浦尋常小学校統合後の明治20(1887)年に建てられた附属幼稚園の園舎です。
【情報ライブラリー検索キーワード「学校」】

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★

5月22日(日)・6月19日(日) 両日とも午後2時~(1時間30分程度)

テーマ:「弥生時代の紡錘車」(5/22)・「古墳時代の紡錘車」(6/19) 会場:博物館視聴覚ホール

★★はたおり体験★★ 6/18・6/25・7/2・7/9・7/16・7/23(いずれも土曜日)

さき織り(裂いた古布をよこ糸に使う織り方)を体験します。 ※要予約です。詳細はお問い合わせください。

★★土浦ミュージアムセミナー2016★★ 土浦地域の歴史について、学芸員が研究成果をお話します。

6月12日(日)「儒者藤森弘庵と土浦藩」木塚久仁子

6月19日(日)「地理情報から見た法雲寺立地環境の試案」中澤達也

6月26日(日)「坂田地域の縄文貝塚」一木絵理

7月3日(日)「市民の記憶から見た土浦」野田礼子

7月10日(日)「弥生時代から古墳時代の生業について」黒澤春彦

★★拓本同好会作品展★★ 6月15日(水)~7月9日(土)

★無料開館のお知らせ★ 5月15日(日)・18日(水) ※国際博物館の日。

★今年度の春季展示は5月14日(土)~6月26日(日)までです。 ※休館日は毎週月曜日です。

時間:各回午前10時~11時30分まで
会場:博物館視聴覚ホール
受講料:各回50円(資料代)
定員:各回50人(当日受付)



博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

仏に供える灯

とうみょうどき

—古代の灯明土器—

寺院の仏殿や宅内の仏壇に厳かな明かりが灯されている光景は、現在でも一般的に目にすることができます。明かりは、油を燃やす灯明からロウソク、そして電灯へと変化してきました。しかしながら、現在でも歴史のある寺院に対して「法灯を伝える」という表現がされるように、仏教と明かりを灯す行為は親密な関係にあることがうかがわれます。日本における灯明の始まりは仏教の伝来と軌を一にし、都を中心に本格的な寺院が建立される飛鳥時代までさかのぼるとされます。

土浦市内の遺跡で灯明土器が出土するようになるのは、平安時代の9世紀のことです。以下は、古代の灯明土器の役割を考えるうえで興味深い出土状況を示す2つの遺跡を取り上げます。それは市内北部の今泉にある根鹿北遺跡と東部のおおつ野にある長峯遺跡です。

根鹿北遺跡では9世紀中頃に仏堂が建てられ、堂内に五重塔や金堂のミニチュアである瓦塔や瓦堂が安置されました。発掘調査の出土品から、この仏堂は土壁で作られ、瓦塔や瓦堂を前に灯明を灯して仏教儀礼が行われたことが想定されています。多数出土した灯明土器は、いずれも径9cm程度の小ぶりのもので、縁には灯心を添えて火を灯した痕跡が残ります。この灯明土器は他に類を見ない作風のもので、当時の甕の作り方と同様の技法が用いられ、灯明専用の土器として作られました。この遺跡では仏堂が造られた時期に集落は形成されておらず、甕を中心とした土器生産とのかかわりの中で開発が進められた土地であると考えられます。

長峯遺跡では9世紀中頃に仏堂が建てられると同時に、その周辺には竪穴住居も造られました。そこでは日用雑器である土器類が多くみつき、「長谷寺」と墨で文字の書かれた墨書土器や食器を転用した灯明土器も出土しました。この仏堂の中には仏像などの信仰の対象となるものが祀られ、それを前にして灯明が灯されたものと考えられます。

2つの遺跡の灯明土器の出土状況は、仏教信仰に灯明を灯す儀礼がともなったことを示しています。また、両遺跡で使用された灯明土器の違い—専用に転用か—は、仏堂建立に関わる人々の生産基盤の違いも反映している可能性が考えられます。

(関口 満)



灯明土器[専用] (根鹿北遺跡出土)



灯明土器[転用] (長峯遺跡出土)

※○は灯心を添えた箇所

6/11 (土) 11時・14時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも古代コーナーに展示)

- 根鹿北遺跡出土の瓦塔・瓦堂
- 長峯遺跡出土の墨書土器



むじゅう

僧無住の遺産

ぞうたんしゅう
— 『雑談集』 (その一) —

仏教諸宗派が多く誕生した鎌倉時代は、歴史に名を残す僧侶が次々と現れた時代でもありました。そうした僧の1人に、無住房道暁むじゅうぼうどうぎょうがいます。嘉禄2（1226）年鎌倉に生まれ、若年は関東の諸寺で律、密教、禅を学び、後半生は尾張・長母寺ちやうぼじで民衆の教化に尽くしたことで知られています。高僧と呼ぶにふさわしい事績もさることながら、彼の名を広く知らしめたのは著述家としての側面です。弘安2（1279）年には仏教説話集である『沙石集』しゃせきしゅうを書き始め、同6（1283）年に完成させています。平易な話題を手がかりに、仏の教えを説いた同書は広く読まれました。また、嘉元3（1305）年、無住80歳のときに、同じく仏教説話集『雑談集』10巻あらかわを著しています。

常陸の地に暮らす私たちにとって無住の著作が重要なのは、彼が僧侶としての第一歩をこの地で始め、常陸のことを書き残していることにあります。『雑談集』には、自らを「愚老」と称してその歩みを「述懐」した箇所があります。それによれば、13歳で鎌倉の僧房に住み、15歳で下野の伯母しもつけのもとに行き、16歳で常陸に移り、「親シキ人ニ養ワレ」て18歳で出家したと述べています。若き無住がどこで出家したのか、『雑談集』には書かれていません。20歳の頃には師匠から房を譲り受け、27歳のとき「事ノ次ヲ以テ、住房ヲ律院」としたと綴っています。

無住の「愚老述懐」には、これまで教えを受けた師匠について記した箇所がありますが、「幼年」に教えを受けた師として「三井寺ノ圓幸教王坊ノ法橋」みいでら えんこうきょうおうぼう ほつきょうを挙げています。この僧の名は、無住のもう1つの著作である『沙石集』に、「常州ノ東城寺ニ、圓幸教王房ノ法橋ト云テ、寺法師ノ学生有ケリ」とでてきます。常陸で出家した無住に房を譲ったのは、おそらくこの圓幸教王房とみてよいでしょう。土浦市北部にある東城寺が平安時代から天台宗と深く関わっていたことは、東城寺経塚出土の経筒の銘文などが伝えるところであり、三井寺すなわち天台宗の園城寺おんじょうじ（滋賀県大津市）から来た僧が東城寺にいたことも頷けます。

無住27歳の時に住房を律院としたという記述も見逃せません。律院とは、ここでは西大寺流律宗さいだいじりゅうりつしゅうの寺院を指します。無住27歳は、建長4（1252）年にあたります。律宗を東国に広めるため律宗の僧忍性にんしやうが常陸国を訪れたのも建長4年であり、翌年には忍性が主導して東城寺に結界石けっかいせきが立てられました。このことも、若き無住が最初に止住した寺が土浦の東城寺であったとの理解を導きます。高僧として名高い無住が若年土浦におり、この地で忍性との邂逅かいこうを果たしたであろうことは、『雑談集』が伝える中世土浦の歴史の一齣ひとこまといえます。（堀部 猛）



『雑談集』一之二・五之六・七之八
(当館所蔵)

6/4 (土) 11時・14時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも中世コーナーに展示)

- 東城寺経塚の出土品（複製）
- 東城寺結界石（拓本）



飲み水をもとめて

— その二 「鑿井図」 —

真鍋村善応寺の照井から土浦城へ上水道が引かれていたことを示す木製の管や柵を前号「霞」33号で紹介しました。城に出入りする侍は上水道から飲み水を得ることができましたが、城下町の住人はどうしていたのでしょうか。泉や湧き水、川の水を汲んで飲んでいたようです。

土浦藩領小田村の名主から土浦藩士に取りたてられた農政学者長島尉信（1781～1867）は、土浦町の飲料水について著書「土浦洪水記」の中で次のように述べています。「土浦の町ニ井戸なく飲水ニハほりの水を用ひ候ゆへ、旅人は是をミテ嫌ひ自つと此宿ニ泊少く候よし（土浦には井戸がなく堀の水を使うので、旅人がいやがって宿泊客が少なかった）。享保11（1726）年頃、土浦藩が井戸掘り職人を斡旋して土地を検分させたところ「井戸には向かない」と言われ、職人でさえも掘るのを断念したと尉信は続けています。

転機が訪れたのは70年後の寛政9（1797）年2月のことでした。江戸本所から井戸屋八右衛門が手下11人を連れてやってきました。2月14日から3月5日まで「つきぬき井」の工事が行われ、大もととなる「本井」を不動院（市内中央1丁目）門先に、呼び井戸（井戸水の分水）を2ヶ所据え、工費30両は町内の持寄金（共益費）でまかないました。こうして町の共同井戸が完成しました。

この時の様子を絵に残したのが城下町で塾を営んでいた沼尻墨僊（1775～1856）です。「鑿井図」と題した巻物に、着々と工事が進んでいく様子、完成した井戸から勢いよくあふれる水を色彩豊かに描きました。井戸をまつるため大きな鯛と鏡餅を供えた神事の場面からは、町の人々の喜びが伝わってくるようです。川や泉、堀に汲みにいかななくても、いつでも新鮮な水が手に入るようになりました。

墨僊は天体観測や、大輿地球儀・渾天儀の製作で知られています。墨僊の科学的なまなざしは「鑿井図」にも現れており、末尾には「井匠要器」として、鶴嘴・唐鍬・鍬・犁など井戸掘りに使った特殊な道具が精緻に描かれています。

（木塚 久仁子）



「鑿井図」部分（個人所蔵）



5/28（土）11時・14時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示）

- 大町の井戸（写真）
- 墨僊漫筆之稿（江戸時代後期）



土浦小学校の最初の校舎

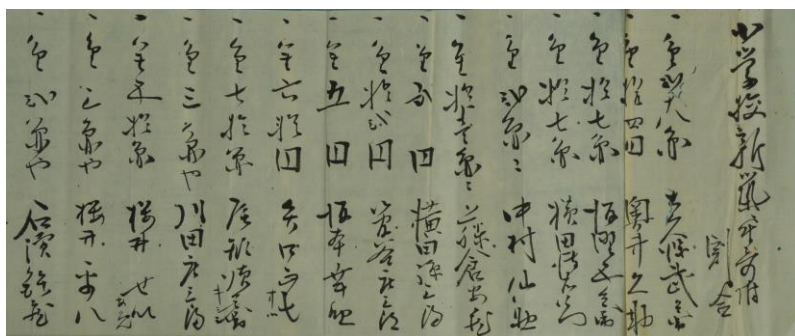
—人々の寄付が支えた学び舎—

平成 26 (2014) 年に鉄筋コンクリート3階建ての明るい校舎が完成し、新たなスタートをきった土浦市立土浦小学校。現代の私たちにとって専用の校舎と教室があることは、ごく当たり前の風景ですが、学校制度がはじまって間もない頃は、たくさん子どもたちに一齐教授をするため、既存の建物を教室として利用することが、珍しいことではありませんでした。

明治6 (1873) 年の開校当初には瀧泉寺(市内中央2丁目)の本堂を、さらに神龍寺(文京町)、浄真寺(立田町)の建物を借り受け授業が行われました。同7年には、旧土浦藩会所(中央1丁目、現在の裁判所の向かい)を女子小学校(香澄小)として利用しています。同8年には、教員19名、児童数450名の大所帯となり、色川三郎兵衛ら学区取締役からも学校教育と校舎新築の必要性について意見が出されました。しかし、校舎の建築には多くの資金が必要です。

「土浦尋常小学校沿革誌備考」(以下「沿革誌」)の中には、校舎新築のための寄付金額と氏名等の書上げが残されています。元土浦藩主土屋拳直(150円)を筆頭に、横町・田町・中町・本町・川口町・中城町・西門町・田宿町・大町の約150名が1人(1世帯)あたり2~100円の寄付をしています。人数・金額ともに一番多いのは、中城町で、33名430円(平均13.03円)です。金額はどのように決めたのでしょうか。写真は、「小学校新築二付寄附割合」とはじまる中城町(中央1丁目)尾形徳兵衛家に伝わる文書ですが、34名の氏名と金額が続き、「九年九月 扱所」と結ばれています。「沿革誌」の記録と照合すると、中城町の情報とほぼ合致しました。まず、各家ごとの金額を決め、寄付を行った様子がうかがえます。当時は保護者の収入に応じた授業料の等級もありました。また、「沿革誌」には外に、下高津村学校生徒45名から3円、人足(建設工事に関わった職人)574人から51円66銭の寄付があったことなども記され、様々な人々の支えのもとに学び舎が形になったことが理解できます。

新築のための寄付金の合計は1,673円9銭、県庁からの御下賜金(補助金)300円、支出は1,904円46銭、残金68円63銭で、実に8割強が寄付によるものでした。明治9年12月、2階造り10教室を有する最初の校舎の落成式が行われました。(野田 礼子)



「小学校新築につき寄附割合」部分 (個人所蔵)

5/21 (土) 11時・14時からこのページでご紹介した資料の展示解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近代コーナーに展示)

- 土浦小学校敷地之図(土浦市立土浦小学校所蔵)
- 土浦尋常小学校女子部略図(土浦市立土浦小学校所蔵)
- 香澄小学校試験得点表(当館所蔵)



市史編さんだより

江戸の世相—にせもの・パロディーの文化—

土浦市立博物館の第37回特別展は「まちのしるし—しるしが語る土浦の近代」でした。この展覧会の図録に文章を寄せてくださった学習院女子大学教授岩淵令治氏の講演会「江戸の酒と似印」が3月20日にありました。この講演会でのお話を伺い、これまで長い歲月江戸の世相に付き合ってきて、いろいろ不思議に思っていたことが、とても納得できたのです。ここでは、「家事志」を例に、江戸の偽物に対する世相を捉え、また岩淵氏による講演や図録を読んで感じたことを述べてみたいと思います。

市史編さん係では平成9（1997）年の4月から「家事志」の輪読会を始め、20年近い年月をかけて色川三中・美年兄弟の日記『家事志 第一～六巻』を出版しました。その成果もあって、色川三中関係資料一括が今年の1月に茨城県の文化財に指定され、とても嬉しく思います。

『家事志 第一巻』の文政10（1827）年11月5日の条に土浦中城町名主の入江父子に誘われて、笹屋へ旅の講釈師の話聞きに行く件があります。甲州出身の講釈師の分身と思われる鉄三郎という男が放浪の末、長崎から出帆した船が難破して漂流する冒険談です。初回は笹屋で、2回目からは入江宅で、17日までに全6回話を聞いたと記しています。その内容を、途中までは「家事志」に書き込んでいましたが、長編になるとということで別冊に記し、現在は静嘉堂文庫にその草稿と手書き本が残っています。

三中はこの冒険談に「投獲志」と名付けて、自分流の脚色も施し、手書き本にして知り合いの人々に見せました。1年後の文政11（1828）年11月14日の条に「投獲志前編序成ル、木原御氏自ら御持参候、渡辺御氏殊外感し被思、実ニ小馬琴といふべしと也」とあります。藩士の木原様には、この本の序文を書いて頂き、出来あがったものをご自分で持ってこられ、渡辺様も読んでくださり、大変面白かった、実に小馬琴だねとおっしゃった、というのです。木原様は名を行蔵、号を荷亭といて、土浦藩の学者木原老谷の父にあたる人です。馬琴は勿論当時有名だった「南総里見八犬伝」の作者滝沢馬琴のことです。投獲志とは、夢を食べるという伝説のある獲という獣に投げ与えるような本という意味でしょうか。

現代の感覚では、旅の講釈師が話した内容を紙に書き写したものを、勝手に題をつけて本にして人に見せ、小馬琴だなどともてはやされるというのは、いわゆる盗作に当たるのではないかと、思えるのですが、著作権や登録商標などという権利が法的に認められていなかった江戸時代は、偽物の存在は本物が有名なことの勲章ぐらいにしか扱われていなかったのだ、と理解できたのです。そのような世相だったからこそ、大らかに本歌取りや見立てなどパロディーを駆使して洒落のめす、狂歌・川柳や歌舞伎の題材などが隆盛を極めたのでしょう。

昨年は戦後70年ということで全国的に色々な行事がありました。戦争がない70年、でも、江戸は200年以上戦争がなかったのです。天災や政治の不祥事はあったにせよ、平和な暮らしが明日もある、という漠然とした安心はあったと思います。だからこそ、頓智やユーモアは大手を振って歩けたのでしょう。

明治になって外国との交易や文化の交流が盛んになり、それに適応するために明治17（1884）年6月に商標条例が制定されたそうです。特許や登録商標などの法律が整備された時代に暮らす私たちには、不思議な事象の多い江戸の世相や文化です。

（社会教育指導員 村松 常子）

地域と博物館

博物館と展示（2） ～地域独自の展覧会を一特別展・企画展の開催～

このシリーズの2回目に、当館は地域博物館としての任務が大切なこと、有形無形のさまざまな地域の記憶を刻み、未来に伝える役割があることを述べました。そして今回は、地域の特性を発信するため、特別展などの展覧会を積極的に開催する館の方針についてお話をしました。平成16（2004）年、常設展示のリニューアルを計画する際、あらためて当館が目指す博物館像を提示しています（『土浦市立博物館常設展示改装基本計画』）。それによると、当館は土浦地域に生きた先人たちの歴史を紹介し、市民が地域の歴史を学び、再発見する場であることを地域博物館の役割としています。また、もうひとつの役割として、「地域から歴史を見直すこと」もうたっています。

土浦地域の歴史的・文化的特徴を解明するには、十分な資料収集が必要であり、他の研究機関との連携も図りつつ、学術的な調査研究が求められます。また、展覧会や研究報告などを通して、その成果を広く市民に還元していくことも大切です。当館では、特別展や企画展の開催にあたり、「地域独自の展覧会」を心がけてきました。この展覧会は、当然ながら地域に立脚し、地域史に関わり深いテーマにこだわり企画しています。これによって、新たな調査研究成果が蓄積され、資料の公開活用を実践する。これは当館が行う博物館活動の最大の特徴になっています。

開館以来、年平均3～4回の展覧会を開催してきました。昨年度までに、特別展37回、企画展35回、テーマ展11回、収蔵品展12回、その他の展覧会6回、計101回の展覧会を開催しています。テーマは古代・中世から近・現代の地域史、地域の民俗や人物など、多様な内容です。土浦という限られた領域の中で、地域に根ざしたテーマで100回を超える展覧会を開催することは容易ではありません。

開催に当たっては、必ず学芸員がテーマの選定や企画立案を行うことにしています。与えられたテーマや出来合いの企画を採り入れるのではなく、担当学芸員が主体的に企画・開催した「地域独自の展覧会」は、継続した調査研究に発展する可能性が期待され、更なる成果の公開活用にもつながっていきます。これまでにも、筑波山の信仰、江戸時代の絵図・世界図、土屋家の茶の湯、土屋家の刀剣・甲冑、近代土浦の幼児教育、戦時下の土浦、はたおり等々、継続した調査研究の成果を二度にわたる展覧会で公開したのがあります。今後も、常総地域の一画を占める土浦の「地域（の歴史）から（日本の）歴史を見直す」、この視座を大切に、独自の展覧会を継続していく必要があります。

（塩谷 修）



特別展「土屋家の茶の湯」
(1992年)



特別展「土屋家の風雅」
(1998年)



特別展「暮らしにいきづくはたおり」(2001年)



特別展「暮らしをささえる女性たち」(2012年)

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、尾曲香織さん（2016年3月末まで当館の非常勤職員）に寄稿いただきました。

モノの見方あれこれ

先日、小学3年生の校外学習の時期（平成28年1月～2月）にあわせ、昔の暮らしの道具を展示しました。多少ばらつきはありますが、おおむね昭和30年代に利用されていた道具を対象としました。子どもたちには、教科書に掲載されているような、当時の洗濯機やテレビなどが好評だったようですが、印象的だったのは先生方のあるモノを見た時の反応です。あるモノ、とは編機あみきです。下見の際に編機を見て「母親が使っていた」と懐かしむ先生方もいましたが、特に盛り上がったのは、複数の先生方の間で「知っているかどうか」に差が出た時でした。懐かしむ先生方がいる一方で、おおよそ20～30代の先生方は何に使う道具かわからない場合がほとんどで、知っている他の先生方がそのことに驚く、という場面に何回か遭遇しました。実は館内でも編機を知っている職員と知らない職員がおり、私も収蔵庫で見るとまでは知りませんでした。

博物館で昔の暮らしの道具というテーマで展示をする際、昭和30年代頃を中心に構成する傾向があります。それは、家電製品の登場によって私たちの生活が大きく変化した時代であり、実物も残っているために展示しやすいことも理由の一つでしょう。そして何より、展示資料を実際に使ったり、見たりした人たちが懐かしむことができ、自分と展示とのつながりを感じられる楽しみが得られたこともまた理由に含まれるかと思えます。彼らがその場で語った具体的な経験は、モノの使い方だけでなく、その当時の空気も伝えてくれます。その一方で、現在の小学3年生にとってはそういった世代が身近にいない場合もあり、具体的な話を聞くことがないまま、教科書で学んだことを確認する場となりつつあります。両者をつなぎ、異なる世代の暮らしを知る楽しみが伝わるような工夫が学芸員として今後できれば、と考えています。（北海道博物館学芸員 尾曲 香織）

コラム（34） 醤油ラベルの魅力

博物館では、この春、特別展「まちのしるしーしるしが語る土浦の近代ー」を開催しました。展示資料は多岐にわたりますが、近世から近代にかけて土浦で盛んだった醤油醸造に関わる資料は、しるしの機能と展開をみるうえで格好の資料といえます。

とりわけ目を引くのは、明治時代以降の醤油の樽や瓶に貼る醤油ラベルです。醤油の商標を中央に配し、醸造元などが書かれます。多くは醤油の原料である大豆や小麦の図柄をあしらっています。英文で「JAPAN BEST SHOYU」などと書くものも多く、その書体や色鮮やかな印刷は、見る者の目を楽しませてくれます。小さな紙に美しく文字と図を配した醤油ラベルは、近代デザインの粋が凝縮されているようです。（堀部 猛）

情報ライブラリー更新状況

【2016・5・14現在の登録数】

古写真 557点（+5）
絵葉書 469点（+5）

※（ ）内は2016年1月5日時点との比較です。

展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2016年度

春季展示室だより（通巻第34号）

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～5ページのタイトルバック（背景）は、博物館2階庭園展示です。

次回夏季展示は、2016年7月5日（火）～9月25日（日）となります。「霞」2016年度夏季展示室だより（通巻第35号）は7月5日（火）発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます（カラー）